

牧師室から (2020. 6. 7)

一時期、チャップリンの映画に夢中になったときがあった。チャップリンの表情や衣装、何よりもユニークなしぐさ、無声であるのにもかかわらず伝わるメッセージに魅了された。貧しい幼少期を過ごした彼の映画には、喜劇特有のおどけたところはあるが、弱者と疎外されている人々への優しさがユーモラスに伝わって来る。深い悲哀を伴っているが、心に沁みってくる温かいものがある。

チャップリンの映画の中には、セリフや音声を入れているものもあり、その中でも「独裁者」は多くの人に良く知られていると思う。この映画は1940年、第二次世界大戦が始まって間もない時に作られた。明らかに当時のヒトラーを指している役のヒンケルと、そのそっくりの理髪師チャーリー、二人役をチャップリンがこなしている。最後のシーンであるチャーリーの演説に、とても感動したのを覚えている。反面、独裁者を風刺しているヒンケルの姿はあまりにもばかばかしい。しかし、コメディだからということで、笑って済ませるものではない。当時のヒトラーが行った政治とは、実際にあまりにも愚かで、その考えられない行為が民衆に受け入れられ、許されたというのがおかしいほどである。しかし、第一次大戦後の酷い不況の中、人間としてどのように生きるべきか、というより、生存それのみに執着してしまった、当時の人たちの問題でもあり、人間だれもが作り上げる歴史でもある。

多くの人々が現実の不安と厳しさが深まるほど、目に見えるものを求め、力あるものに頼ろうとする。その強い願望によって、人間として守るべき大事なものを簡単に譲ってしまう危険性は今の時代にも潜んでいるのではないだろうか。あるドイツ哲学者の「人間は歴史から何も学ばない」と言った言葉を思い出す。架空と虚偽の希望と安全に惑わされないように、そして、どのような状況の中でも人間らしさを失わない勇気を持つために、私たちは眠ってはならない。

「誘惑に陥らぬよう目を覚まして祈っていなさい。・・・(マタイ 26:41)」と眠っている弟子たちにおっしゃった主イエスのお言葉を覚えつつ。

(鈴木善姫牧師)